
ゆく年来る年

櫛方

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゆく年来る年

【Nコード】

N3412D

【作者名】

櫛方

【あらすじ】

大晦日ゝ年明けまでの心境及び出来事を、一人一人をクロースアップして時間順に描きます。

PM3:00(前書き)

初めて投稿させて頂きます。拙い所ありますが(特に改行に自信がありません)ご了承下さい。
最初は毛利蘭からです！

PM 3:00

とある有名洋服店のロゴ入りの紙袋のテープを、ビリッと剥がす。

その黒髪の少女 毛利蘭は、親友の鈴木園子にカウントダウンパーティーに誘われていた。

このパーティーは、社交的な物では無く、鈴木家の面々と親しい人が集うパーティーなのだという。だから、蘭以外にも、園子のクラスメートが何人が誘われていた。

「そんなにカタいもんじゃないけどさ、せっかくなんだし、可愛い恰好していきなよ」

との園子の勧めにより、先日ショッピングセンターで買って来た服。それを袋から出し、眺める。

胸元に大きなリボンをあしらった、裾の形が綺麗な、濃いめの色の上品なワンピースだ。ワンピースというより、ドレスと言った方がいいかもしれない。園子も【絶対似合う！】と絶賛した物だ。園子は、それに合うこれまた上品なショールを貸してくれた。

彼女はふと思う。このドレスを着た姿を、新一が見てくれればいいな、と。

無理だと言う事は分かっていた。クリスマスが過ぎた頃、新一から電話でそう言われたから。【カウントダウンは一緒に】の言葉を期待した蘭だったが、その期待はあっさり打ち砕かれた。

結局、クリスマスにも大晦日にも会えなかった。蘭は溜息をつく。来年、私達はどうなるんだろう？この調子で、一年も二年も待たなきゃいけないのかな？来年も、そのまた来年も、悲しい思いで過ごさなきゃいけないのかな？

新一は【ごめん】って言った。【パーティーを楽しんで来い】とも。でもさ、謝ってくれたって悲しいものは悲しいんだよ、新一。あなたは事件に夢中になってるからいいかもしれないけど、私は…

分かってるよ、新一を責めても仕方ないってことぐらい。というより、私にはこれ以上責められない。事件を追いかけてない新一なんて、新一じゃないと思うから。

でも、会えないのは悲しいよ。全く、悲しい気持ちを引きずったまま、新しい年を迎えなきゃならないじゃない。ただでさえ、大晦日は、今年あった色々な事を思い出す日。余計なくなっちゃうじゃない…

会いたいよ…新一…急に涙が頬を伝う。泣いちゃダメだと蘭は思う。泣いたら、せつかく買った服にシミが付いちゃうし、それに、それに…

…新一ならきつと言うだろう。【その綺麗なドレスに涙は似合わない】と。あの気障な口調で。

そう考えると、自然に笑みが零れた。そして思う。ああ、やっぱり私の心は新一でいっぱいなんだな、と。少し苦笑いしつつ、鏡の中の、綺麗な服に身を包んだ自分を覗き込む。

「まあまあかな」

自分に微笑みかける。その笑顔には、全くくすみがなくて。

新一は言ってた。【来年には必ず】って。その言葉を信じよう。来年にはきっと、『日常』が帰って来る。新一は事件を解決して、二人は高校三年生になって、一緒に学校へ行って。

「そっだよね、新一？」

蘭は呟き、そして微笑んだ。

PM3:00 (後書き)

お読み下さってありがとうございます。いかがでしたか？

三人称と一人称を行き来してみたり、改行が変だったりと、読みにくくてすみません。

「その人っぽい」言い回しを考えるのは本当に難しいです。特に園子の台詞：終わった…（泣）キャラを壊してすみません。

評価・感想お待ちしております！

よろしく願います！

P M 3 : 3 0 (前 書 き)

年は明けましたがコナン達の年はまだまだ明けません…早く終わらせます…

次は江戸川コナンです！

PM 3:30

江戸川コナンは、ベッドの上に座って悩んでいた。

事の起こりは、少年探偵団に引つ張り出され、米花公園で遊んでいた時。

「寒いのによく遊ぶ気になれんなー…」

呆れてコナンが白い溜息をついた時、歩美が言い出したのだ。

「今夜みんなでカウントダウンパーティーをしよう」と。

コナンは小さく舌打ちをした。もしパーティーなんてやる事になっちまったら、オレも引つ張り出される事請け合いだ。

それは避けたかった。

蘭と一緒に、園子の方のパーティーに行こうと思っていたから。そこでこう言った。

「お前らなー…今からやろうつつつつって、無理に決まってるだろーが。第一場所はどーする。準備とかだってしなきゃいけねーだろ？」

「そつか…」

落ち込んだ顔の探偵団に、コナンはさらに言う。

「だろ？だから止めとけて。家でやりゃいーだろ。カウントダウンぐらいよ。」

「そうだ、阿笠博士の所でやれば良いじゃないですか！」
光彦の一言に、探偵団の瞳が再び輝き出した。

「そうしようそうしよう！」

「ナイスだぜ、光彦！」

「博士に頼めば、きつと食べ物とかも準備してもらえますよ！」

「食いモン！！うな重食べっかな！？」

「全く、元太君はうな重の事ばかりなんですから……」

「でもさ、大晦日なんだし、きつと食べられるよ！」

「そうだよな、歩美！」「おいお前らな、博士だって迷惑するだろ……」

「じゃあ今から聞いてきましようよ！」

「うん！」

「おう！」

「おーい……」

コナンの制止の声も空しく、三人は駆け去ってしまった。

コナンは溜息をついた。灰原に助けを求めたくても、こう言う時に限っていない。それにあのお人よしの博士の事だ、すぐOKして張り切って準備するに決まってる。コナンは三人を追うのを諦め、探偵事務所へ帰って来たのだった。

と言う訳で。

コナンは蘭の方のパーティーと、探偵団の方のパーティーとを秤にかけていた。

蘭の方のパーティーへは行きたい。アイツの側に居てやりたいから。けどなあ……探偵団の方のパーティーを、蘭を理由に断ると、また問い詰められそうで怖えし、アイツらに嘘もつきたくねえし。それに……

それに、灰原。アイツの事だ、どうせまたなんか下らねえ事で思い詰めてるんだろう。それも大晦日って事でその思い詰め方もグレードアップだ。それとも取り憑かれたように研究してっのか？どっち

にしろほつとけねえよな…

ここまで考えて、ハツと気付いた。おいおい、オレは何をこんなに真剣に悩んでんだ、と。

今の 江戸川コナンとしての 生活に、こんなにも溶け込んでいる自分にゾツとする。ダメだ、このままじゃホントに江戸川コナンになっちまう。蘭の側にいるに決まってるだろうーが！

だがしかし…やっぱりオレは江戸川コナンなんだよな、と、頭の中で声がする。アイツについて行ったら、所詮オレは、工藤新一の姿ではない。今のオレじゃ、どーにもならねーんだよな…

この一年で、随分弱気になったもんだよなあ…コナンは苦笑する。黒の組織には始終ビクビクしてっし、蘭の事だっけそうさ。考えてみりゃ、蘭に正体を明かす事ぐらいいつでも出来るんだよな…アイツを危険に巻き込むのが怖い、ただそれだけの理由。正しい事をやってるっちゃやってるんだが、それでも、蘭を辛い目に合わせちまってる。

けど…コナンはふと思った。これが本当に正しい事なのか？

蘭に正体をバラさない これだけで、本当に蘭を危険から遠ざけられるのか？

オレが関わる事件には、凶悪な物や、組織絡みの物もある。現にアイツは何度も事件に巻き込まれてる。巻き込まれんのも当然だ。一緒に暮らしてんだぞ？行動だっけ一緒にいるに決まってるじゃねーか。それに…

それに、何時オレの正体がバレるかしれねえ。そしたら一番最初に

狙われんのは誰だ？オレ自身かもしんねーが、正々堂々と来るような奴らじゃねえ。蘭だ。アイツが巻き込まれるに決まってる。

コナンは思わず声に出して笑ってしまった。何だ、アイツを守ったつもりになってたが、全然守れてねーじゃねーか。

じゃあ。オレは、ここを出れば良いんだろうか？

違う。頭の中で強い声がした。

何故だ？コナンは自問する。江戸川コナンが、蘭にとって何の得になる？オレは小一のガキだ。アイツを守る事なんて出来やしない。それに、アイツが今必要なのは、工藤新一ただ一人。自惚れじゃねえ、見てりゃ分かるさ。江戸川コナンの存在は、せめてもの気休め程度。ただの気休めが、蘭を危険にさらしてまで、側にいる必要があんのか？

「工藤新一」は、随分遠い存在になっちまったなあ。コナンは苦笑する。コナンは考えた。どんな謎を解く時よりも真剣な瞳で…

オレは、一体、どうするべきなんだ？

しばらくして、コナンはフツと息をつき、そして笑った。何だ、簡単な事じゃねーか。コナンは思う。こんな事も分かんねえようじゃ、高校生探偵も形無しだな。

そう。全てはコナン自身のため。『正体を隠して思い人の家に居候』

最初は状況的に仕方ない事だったかもしれないが、この状態を続ける事を選んだのは自分自身だ。変えようと思えば変えられたのに、

そうしようとはしなかった。

蘭の所に居候しているのは、蘭の側にいたいから。蘭を本当に危険に巻き込みたくないのなら、あの時の両親の勧めに従って海外へ行くか、良くて阿笠邸だろう。そしたら蘭には会えない。

蘭に正体を隠すのは、蘭に心配されたくないから。新一から連絡が来ないと言っただけでも本気で心配する蘭に、事実を話したらどうなるか、想像に難くない。蘭はしっかりした女性だ。正体をバラしたからって、その辺でコナンを新一と呼ぶとか、正体を他人に口外する事なんてないだろう。危険とは関係ない話だったのだ。

ここまで分かったら話は簡単だ。コナンは思う。姿が小一のカギだろーが関係ねえ。アイツを精一杯守るんだ。よし、来年こそは、黒の組織をとっ捕まえないといけねーな。そして、一刻も早く元の体に戻って、オレの思いも伝えねーと。

オメーを絶対守るから、だから…

オレの我が儘、許してくれるよな、蘭？

コナンは決意を新たに立ち上がった。そして迷わず、蘭の方のパーティーへ行く準備を始めた。
と、その時

「コナン君！歩美ちゃん達が来たよ！博士の家でカウントダウンパーティーやるんだってね！」
「あつ、蘭姉ちゃ…」

コナンは目を見張った。ドアの前に立っているのは、蘭であって蘭でなかった。

美しい。

シヨールが風にフワツとなびく。濃い色のドレスが、彼女の白さを引き立て、美しく、上品な女性として目の前に花開いていた。長く綺麗な黒髪は揺れ、瞳は美しく輝いて

「　　じゃない？歩美ちゃん達の方がきつと楽しいよね…」

「えっ？あ、そ、そんなこと…」

「遠慮しなくて良いのよ。私は園子と楽しんで来るから　じゃあね、行つてきまーす！」

「ちよ、ちよつと蘭姉…！」

蘭は行ってしまった。これじゃ空回りじゃねーか。でも、オレが蘭

に見とれてたのも悪いんだよね…コナンは苦笑する。

「まっ、しゃーねーか」

コナンは呟くと、少し笑った。

PM3:30 (後書き)

お読み下さりありがとうございます。

『蘭を守るため、正体を明かさず蘭の家に居候する』と言う原作の設定に疑問を感じていたため、書いてみました。

結構長くなってしまいました。すみません…

評価・感想もよろしく願います！

P M 4 : 0 0 (前 書 き)

次は毛利小五郎です！

PM 4 : 00

「行つてきまーす！」

「おう」

コナンの元気な声にそっけなく返事をする、毛利小五郎はキッチンまで歩いていった。冷蔵庫を開け、中を覗き込む。が、お目当てのビールの缶は一本もなかった。小五郎は、チツ、と舌打ちをする、リビングのソファにどかと座った。そしてビールの代わりに、煙草に火をつけ、側に落ちていた新聞を開く。

今年の年越しは、久々に一人なのだ。蘭もコナンも、カウントダウンパーティーに行つてしまつたから。今年は蘭の旨い年越し蕎麦が食べねえんだよね…小五郎は思う。仕方ねえ、今年はカップラーメンで我慢すつかな…

だが、昔の年越し蕎麦は、カップラーメンが当たり前だつたのだ。料理が下手なあ的女性 英理が此処を出て行くまでは。

英理が家を出て行つてから、来年で11年。その時、小さくて愛くるしい7才だつた蘭も、もうすぐ18才になる。子供だ子供だと思つていたが、18才つて言つたらもう立派な大人じゃねえか。小五郎の頭に、柄でもない考えが浮かんた。

そもそも、一人で正月迎えるって事自体初めてなんじゃねえか？英理の事は置いといたとしても、蘭が大晦日の日に家にいないつてのは今年が初めてだ。アイツがこの家を出るのも、時間の問題かも知れねえ。小五郎はふとそう思う。

だが…もし家を出たとしたら…まさか、アイツ…

あの探偵ボウズと…！？

いや、あんな野郎に蘭は渡さねえぞ。小五郎はそう思いながらも、頭のどこかでは分かっていた。アイツを幸せに出来るのは、探偵ボウズこと、工藤新一だけなのだ。

多分アイツも、近い内に結婚するんだろう。この家に、英理が戻って来る、その前に。そーいやアイツ、いつもいつも俺と英理を合わせようとしてたっけ。

すまねえな、蘭…

まったく、それにしても、英理も英理だ。いー加減帰って来いよ！
アイツさえ素直に謝ってくりゃ、俺は…俺は…

10年もたつのだ、英理がこの家を出て行っってから。いい加減、小五郎が自分の気持ちに嘘をつき続けるのも、『もう限界』だ。英理の事が好きだと言う事、帰って来て欲しいと思っている事、どれもとつくに自覚済み。

しかし、小五郎は英理に会おうとはしなかった。意地とプライドが、それを許さないのだ。だが、蘭の地道な働きかけが効を奏し、その意地とプライドが崩れるのももう時間の問題。小五郎がこんな風に、

英理や蘭の事を考えると云う事そのものが、異例の事態なのだから。

アイツに電話でもしてみつかな、小五郎は思った。けどなあ…特に用がある訳でもねえし、あの冷たい声で『何の用?』なんて聞かれたら…

…止めとくか。…畜生、なんで女つてのはこんなに厄介なんだ!小五郎は思考を一旦放棄して、全く読んでいなかった新聞をめくった。その時、小五郎の目に飛び込んで来たのは

『今年のカウントダウンは、沖野ヨーコのカウントダウンTVに決定 歌にダンスにセキラトーク、ヨーコと一緒に年越ししましょ』

丸々一面使った広告に躍る文字と、沖野ヨーコの笑顔であつた。

「ヨ、ヨ、ヨーコちゅわあああんっ!」

躍り上がる小五郎。

「年越しまで一緒だなんて、なんて、なんて幸せなんだあっ!そーだ、ビールだ、ビールが切れてた、買つて来なくっちゃ」

小五郎は、近くのスーパーに駆けて行く。

…どうやら、英理とヨリを戻すのは、もう少し先になりそうだ。

P M 4 : 0 0 (後書き)

すみません、小五郎のキャラが大分違っていました…

でも書いてみたかったです、
恰好いい、「イイ奴」って感じの小五郎を。…いかがでしたでしょうか？
評価・感想お待ちしております！お読み下さりありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3412d/>

ゆく年来る年

2010年10月11日21時38分発行